

尚家旧蔵「組踊集」

翻刻と注釈

(上)

鈴木耕太

概要 尚家旧蔵「組踊集」について

今回紹介する史料は尚家旧蔵（現在、那覇市立歴史博物館所蔵）「組踊集」（以下『尚家本組踊集』とする）である。組踊の台本としては、王府に所蔵されていた唯一現存する組踊集である。一九八七年に行なわれた、沖縄県の組踊台本調査（調査報告書『沖縄の組踊（Ⅱ）』）の項目には「未調査の台本」とあって、これまでその存在は確認されていたが、内容の公開はされてこなかった。那覇市歴史博物館が尚家より寄贈された史料の中に本史料があり、この度、マイクロコピーされたものが公開されたのがきっかけで、今回の翻刻に至ったのである。

組踊は中国から来る冊封使を歓待する芸能として、一七一九年、玉城朝薫によってはじめて創作され、上演された。池宮正治らの先行研究では、組踊はその初演からすでに台本を持った芸能である、と認識されている。先学の認識からは、現存する一八三八年の『躍方日記』やこの『尚家本組踊集』のような、王府の御冠船史料としての組踊集や上演台本は、組踊初演の時点からすでに作成されたと推測できるが、先の大戦で多くが灰燼に帰したために現存しておらず、現在では、先に挙げた二つの他に一九二九年に伊波普猷が編んだ、『校注琉球戯曲集』（以下『戯曲集』とする）が王府上演の記録を残した史料である。『戯曲集』は一八三八年の冊封（通称、戌の御冠船）の中秋宴・重陽宴の上演台本を写したものであり、組踊の詞章や着付、舞踊の歌詞、当時の配役などを知ることができる貴重な史料である。そして「躍方日記」「尚家本組踊集」が最近まで公開されなかったため、現在まで組踊の台本としてまさに一級品の待遇を受けてきた一冊である。

今回翻刻を行った『尚家本組踊集』には、『戯曲集』と同様の「着付」が記載されており、そこから新たな事実も

見えてきた。また、『戯曲集』にはみられない詞章もあり、今後の組踊研究にたくさん情報を与えてくれることは間違いない。戦火を免れ、現在まで残っている組踊関係史料が少ないため、本史料の翻刻・公開は組踊研究ならびに上演の側からも非常に重要なことであると思われる。

本稿では那覇市立歴史博物館の作成した同書のマイクロフィルム複製本を底本として使用する。マイクロフィルム複製本は原本の見開きをA4版に複製しており、現在のところ原本確認の申請中であるため法量は不明である。体裁は和装袋綴じと思われる。

表紙には見えづらいが「組踊集／御近習方／同治六年」の記載があり、最後の冊封（通称、寅の御冠船）が行われた翌年に作成されたものであることがわかる。またその所蔵は「御近習方」であったこともわかる。収録作品は、「辺戸の大王」・「執心鐘入」・「銘苺子」・「大川敵討」・「義臣物語」・「天願若按司敵討」・「二山和睦」の七作品である。今回底本としたマイクロフィルム複製本は、原本を見開きの状態で左右の半丁ずつを一ページとして複写されており、判読しにくいページはコントラストを明るくしてコピーを施したページを、該当ページに連続して付してある。したがって重複ページがあり、全体でのページ総数は一九六ページである。重複ページと白紙・表紙部分を除くと翻刻の該当ページ総数は一七四ページとなる。ページ左下には連番でページ番号が振られているが、ページの次は、またも⁰⁰¹から番号が始まっている。本稿ではこの後半部分を便宜上ページ番号の前にアスタリスクを⁰⁹⁹入れて表示した。（例⁰⁰¹）また翻刻を行うにあたってページ番号とその左右を下段に明示した。まずページ番号とその左右を示し、そのあとに本文を載せた。

今回対象とした部分の⁰⁵¹ページと⁰⁵²ページの記載の順番と内容が逆になっており、原本を確認していないためはつきりとは言えないが、マイクロフィルム撮影の際の入れ違いなどが起こったと考えられる。翻刻の際には内容どおり⁰⁵⁰に記すため、ページの順番は「…⁰⁵⁰・⁰⁵²・⁰⁵¹・⁰⁵³…」とした。

「辺戸の大王」・「執心鐘入」・「銘苺子」の三作品は基本的に二丁に二四行で書かれ、「大川敵討」以降は一丁に一六行で書かれている。最大の特徴としては、最後に収録されている「二山和睦」以外のすべてに題目と着付が記載

いただいた。また、資料を快く提供してくださった、那覇市歴史博物館の各位に、記して感謝申し上げます。

(すすき・こつた 沖縄県立芸術大学大学院博士後期課程)

同治六年卯九月

組踊

御近習方

【001 右・左 表紙】

【002 右】

黄古銅色緞子衣裳金入綿之大帯
白ひけ足袋杖休卓辺戸之ひや黒
緞子入道頭巾印籠黒紗綾衣裳采
絹大帯足袋辺戸之子黒緞子入道頭巾
黒紗綾衣裳采絹大帯足袋大あん

【002 左 白紙】

【003・004 右】

【006 左】

組踊言冊

【003・004 左 白紙】

【005 右】

作白毛緞子衲衣髪差袴白衲衣添差
型付花紗綾衣裳かもし足袋久葉
団扇男孫六人半向頭巾六人分作花六つ
金人銀水引はさら六通作縮緬振袖
衣裳六枚花脚胖六通足袋六足二才孫
花染しほり巾六筋黒紗綾袷衣裳六枚
脚胖六通足袋六足花車ハマからマ一マ式本

辺戸之大主

執心鐘入

銘苅子

大川敵討

義臣物語

天願之若按司敵討

二山和睦

【005 左 白紙】

【006 右】

辺戸之大主

大主青色入綿の丸頭巾印籠

女孫六人紫縮緬長巾八つ助巾八つ作花
指金八対垂髪斗紙八通金銀水引
八通足袋八足辺戸之ひや並同子妻琉縫
薄衣裳袴枚黒地形付袷衣裳袴枚白衲衣
式枚袴式着髪差式つ添差式つかもし
足袋式足衲衣式枚

【007 右】

辺戸のひや

一 出様ちやる二人や、辺戸の大主の嫡子

【007左】

辺戸のひや嫡孫辺戸の子、あゝ豊成

御代や願事も叶て、父母の御歳ことし

百はたち、我身や九十歳いやあも七十に

なやひまたをれば、父母の御果報我々の

悦ひ、いこと葉に出ちいぢや尽くさらぬ、やあ

なし子、けふやよかる日よやれば、父母の

百はたち祝ひふしやあもの、孫子の

【008右】

きや、呼よ集めやひ、思ひ〱の芸能

踊らしやひ御目かけれ、

辺戸の子

辺戸のひや

一 拝むぢゆめや入て、一 たう〱、

急ちおれ〱の用意すれよ、

ひや

一 やあ〱父親よやあ母親よ、

同人

一 やあ父親よ、あゝけふやよかる日ひよひ

やれば、父母の百はたち祝ひしや入ら、

大主

一 あゝなまのことやれば誇らしやと

あゆる、たう〱祝ふて呉れよ、

ひや

一 やあ孫のきや、あしやけんかひおん

つかひすれよ、

同人

一 やあなし子、たう〱急ちけふの

御祝ひ始めよ、

大主

一 はあ〱やあなし子、あのやうに

わら入に杓とらぢ、

【009右】

ひや

一 たう〱わぬ御杓とや入らに、

やあ父親よ、甘酒よやればひとつ

つきや入らに、

大主

一 たう〱、けふやほごらしやの〱

つけよ、

【008左】

ひや

— 加ひてあきやへら、母親も甘酒よ

やれはひとつつきやへら、たう
加ひてあけやへら、

【009 左】

辺戸のひや

— やあなし子、今日や三月花見月

やれは、孫子^二めやひ梅の花挽
踊おとらしやひおめかけれ、

子

— おう

柳ふじ

— 柳はみとり花はくれない

人はたゝ情け梅は匂ひ

ひや

— あゝ出来た、やあ孫のきや、

けふやあつさあもの、あふきしや、
御腰すたひ、たゝちやひしちお

二六孫

しやけれよ、 — おう

【010 右】

子

— やあ男童へのきや、梅の花おとり
おとて御目かけれ、

平敷ふじ

— 梅や冬こもり節よ待かねて

はなの咲くはるに、あふか嬉しや

同ふじ

— 深山鶯もさくやこの花の

匂おくる風のためよりまちゆら

ひや

— あゝ出来た、やあ父親よ、ことし

や梅の花咲かきよらさ、深山鶯も

匂忍てやかとまひてこた

しゆもの、

大主

— あゝいふることに今年や花咲きの

きよらさ

子

— やあ女童へのきや、たう、なるこ

【010 左】

【011・012 右】

ひき踊おとて御目掛け

きんふし女孫六人なるこおとり

- 一 首里おはひ国習ひやびや三味線聞いなるここゑときくゆるわ山国や

【011・012左】

同節

- 一 いつも山国やなるこ声と聞「欠」^{きく}2うちならし——ときにしやへら

子

- 一 けふやほこらしやのひとつおしやかれよ、やあ女子のきや、たう——踊ておめかけれ、

ちるれんふし

- 一 子むまがすろて願たこと叶て大主の百歳御祝しやへら

【013右】

同ふし

- 一 いかれかれけふやたういかれ童へ大主の御祝ひ御伽やれは

大主

- 一 やあ大あむ、孫子の踊しゆすみれは

嬉しやほこらしやの

子

- 一 あゝ出来た——、やあ男子のきや二才おとり踊ておめかけれ、

二才

- 一 おう

【013左】

前の浜ふし

- 一 前のはまに——雪雨のふゆひゆきあめやあらぬ雪の真米

同ふし

- 一 渡地の——浦波の浜ちとり友よふ声やちり——

ひや

- 一 あゝ出来た——、やあ父母よあゝけふや押烈てたかに踊てあすひやへら、

【014右】

- 一 たう——わぬもよらて踊て遊ははやいくわひにや

- 一 けふのいからしや踊はね遊ひ

大主の百歳御祝ひたひもの

同ふし

一 けふのほこらしやゝなをにきやなたてる
つほてをる花の露きやたこと

同ふし

一 九重のうちに香て露まちゆす
嬉しこと菊のはなとやゆる

一 石にや子のいしの大瀬成までも

おかけふさへめしやうれ我御主かなし

執心鐘入

若松半向頭巾天鷲織花金銀水引

はさら花笠板ノ縮緬振袖袷衣裳

脚胖足袋杖女かつら巾琉縫薄

衣裳足袋蠟燭笠座主髪黒繻子

もつ紫縮緬衣金襴けさ水晶の

珠数末広足袋小僧三人髪黒繻子

もつ玉色さや衣足袋鬼女般若

面鉄丁白羽二重銀之鱗形上着鬼面

琉縫薄衣裳足袋

【014左】

【015右】

中城若松出羽金武ふし

一 照てたや西にぬのたけになても
首里みやたりやてとひちゆひ登る

【015左】

一 わ身や中城若松とやゆるみやたり
ことあてと首里にのほる廿日
夜のくらす行先や迷てことに

山路の露もしけさあの村のはつれ

火の光たよて立寄ひ今宵明し

ほしやの此宿の内にもしられ

しやへら旅に行暮て行先も

【016右】

なひらぬ御情に一夜からち給ふれ

女

一 たそよ夜深さに宿からんて

いふすや親のるすやれは自由も

ならぬ

若松

一 露たひんす花に宿かゆる浮世慈

悲よ御情にからちたはふれ

女
一 親のるすなかに宿からちおきよて

与所しれて我身や憂名たちゆめ

若松

一 親のるすてやり自由ならぬていふ
すに繰返ちまたやいひくれしや
あすかわぬや中城若松とやゆる
みやたり事あてと首里にのほる
廿日夜のくらす行先もなひらぬ
戻る道なひらぬゆきつまでをもの

たんで御情にからちたはふれ

女出羽千瀬ぶし

一 里とめはのよていやていふめ御宿
冬の夜のよすか互にかたやへら

若松

一 廿日夜のくらす道迷てをたん
御情の宿にしはしやすま

女

一 まれの御行合さらめあまくかた

【016左】

【017右】

時もおきれ——里よ語りほしやの

若松

一 けふのはつ御行合に語る事なひさめ

女

一 約束の御行合やたにす又しちやれ

袖の振合しと御縁さらめ

若松

一 御縁てすしらぬ恋の道しらぬしはし

まちかねる夜明しら雲

女

一 深山鷲の春の花毎にそゆるよの

中のならひやしらね

【018右】

若松

一 しらぬ

女

一 おとこ生れても恋しらぬものや

玉の盃のそこも見らぬ

若松

一 男生れても義理しらぬものや

【017左】

おれと世の中の地獄たひもの

干瀬ぶし

- およはらぬ里とかねてからしらは
のよて悪縁の袖に結びやへか

若松

- 悪縁や袖にむすははもはからひ
わ身や首里みやりたりやてといきゆる

干瀬ぶし

- 悪縁の結てはなちはなされめ
ふりすてゝいかは一道たひもの

若松

- され〜座主かなし露の身の命ち
すくてたはふれ

座主

- こねや夜ぶかさに重へ声のあすか

いとふしきたひもの急ちきかに

若松

- 一夜かりそめの宿の女悪縁の
つなのはなちはなさらぬ終に

【018
左】

【019
右】

一道とあとから追つけて露の

命ちをとらんとよ行末吉の此

御寺頼まは終に我かいのち頼て

御助わかいのち

座主

- あゝ一だひんな事よ〜命もふり
すてゝ恥も振捨てとまひて来る

はかりたゝやいくまひ女恋こゝろ

倉相にともおもな思つもてからや

のちもとよんかくすかたなひらぬ

むはていやんすれば見ちやるめの

いちやさわ肝くれしや

若松

- 行先もなひらぬ頼てわなひきちやん

慈悲よわか命ちすくてたはふれ

座主

- いきやしかな重へ花の顔かくち露の

身の命ち助けほしやの戻る道

なひらぬ恋のせめかこもあけて

【019
左】

【020
右】

開鐘かねの下にかくさたうくいやく
れく小僧共集め番のしめ

さしやく小僧共やくく

座主

一 耳の根よあさてたによ聞とめれ

花盛り女人とまひてきゆん

禁止よ此寺や齋相にともするな

たとひ寺内やさかひくさはもはからひ

此鐘の近くそさうにするなく

小僧

一 おうやかれよも座主かかちめたる

若衆るすならば互にかたるうれしや

小僧

一 あたら花盛りひちゆひしちならぬ

小僧

一 御縁つくかたと匂やくつす

小僧

一 いやすひさんな小僧

【020左】

女道行七尺ぶじ

一 露の身はやとて自由ならぬよじや

里とまいて互に道ならん

小僧

一 女や法度く戻れく

【021左】

七尺ぶじ

一 禁止のませかきもことやれはことい

花につくは入るきしのなゆめ

小僧

一 昔から寺や女きしをらめいきやる

事あどとまひてきちやか

女

一 七つ重へたるとしころの里に

おもことのおてことまひてきちやる

小僧

一 尋ねゆる里や夢やちやつま

【022・023右】

むたぬ急ち立戻れ女わらへ

女

蟻虫の類ひ情ある浮世慈悲も

定めらぬ人のらめしや

小僧

— うらめゆすきは理りとやゆる

— しらぬふりしちとてゆるす見せら

小僧

— あたま丸めても慈悲しらぬものや

— 石か朝夕さの薪木こゝろ

小僧

— とつ／＼ゆるちみせら

小僧

— 座主のとつけたることや忘れとて

— のよて寺内を廡相にいれる

小僧

— いや推参な小僧

小僧

— あたままるめても女花盛匂に

— ひかされてをかしや／＼

小僧

— いや推参な小僧

【022・023左】

【024右】

小僧

— 春のはな桜色清さあすか又も

— 匂まさる梅とやゆる

散山師

— 此世をて里や御縁なひぬさらめ

— ひちゆひこかれとて死ぬか心気

座主

— はあたひんな事があつたはやう

— 逃けれ／＼たう／＼

女

— 今にふしんなあの鐘よ

但此時女鐘に入鬼に成

座主

— 是やいきやしちやる事が／＼

小僧

— おにの／＼ — ほれたか／＼

小僧

座主

— 鐘の／＼ — ほれたか／＼

小僧

— きしもきしならぬ留もとめならぬ

【024左】

若衆専ねたる女わらへ寺内をさかひち
逢ぬうらめしやに鬼になて

【025右】

鐘にまとひつきやる

座主

一 おれよ——とつけたることや鷹相に

しちをとてかにある事しちやち

いきやかしゆらたう——今からや

いきやいちもならぬこと法力を

尽ち折のけらふよたう——

小僧

一 おう

【025左】

一 東方に降三世明王、南方軍吒

利夜叉明王、西方大威徳明王、北方金

剛夜叉明王、中央大聖不動明

王、——なまくさまんたはさら

た、せんたまかるしやた、そはたやう

んたうたかんまあ、ちやうかせつ

しやとく大ち系、かじしつしや即身成仏

【026右】

銘苡子

銘苡子金入綿入道頭巾水色絵垣

紗綾袷衣裳足袋扇子天女かもし

紫長巾作花金銀水引熨斗紙

天冠琉縫薄衣裳飛衣足袋金銀

薄磨之柄杓娘作花巾無時服袴

衣ひさ取裙足袋男子はあゆひかしらい

【026左】

金銀水引絹布緒付小袖単衣裳綴

子賣物こほすい足袋上使綿子入道頭巾

綴子衣裳錦之陣羽織末広足袋供

式人黒縮緬入道頭巾黒紗綾袖^マ衣裳

足袋

銘苡子

一 出様ちやるものや銘苡子原のいきもとり

はるのゆつきやひにあの松を見れば

【027右】

あの川の本に天と地に光りさしまはて

からに、かはしや匂高さしちやの事

ならぬ肝ふしき思て心付見れば

頭毛のあすかしちやの髪ならぬ

けふのよかる⁵にけふの増る日に
はらにかくれ傍らにたちやひ待
受てむたにまちとめてむたに

通みつぶし

一 若夏かなれは心うかされて

玉水におりてかしらあらは

早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合

一 けふのよかる日やしちやのめもなひらぬ

こゝろやすとあらてのほら

天女

一 やあ〜いきやる事あとてしらぬ

思里か羽衣をとやひまかひいきゆか

銘述し

一 我か松とやゆるわか川とやゆるのよて

【028右】

はころもをかけておちあか

天女

一 里やものしらぬ天と地のなさけ

ふやはちとめたる松も玉水もわか

ものといふすや無理やあらぬ

【027左】

銘述し

一 天と地の情け^{ふみやわし}振合しゆる浮世無

蔵と縁むすて互にそはに

天女

一 御恥かしやあてもいやなまたなゆめ

御縁てすしらぬ浮世てすしらぬわ身や

この世界の人やあらぬ

銘述し

一 天の雨てすも下て水なゆひおりて

世界くれは世界の人よ

天女

一 里かい言葉や此世界の習ひ天の

御定め^の我自由ならぬ

銘述し

一 世界のよすことやたかしちやか始め

天の御定めと世界のならひ

天女

一 玉水にほれて飛衣やとられにや又

自由ならぬ里になら

【029右】

【028左】

銘迦子

- 一 天の引合よ神の引合しよ定め
たる女わ身やまたをらぬけふ
からや互に契る嬉しや

天女

- 一 あまおりしちわ身や夢の間とやすか

【029左】

互になれそめてなし子わなひ
ふたりやあ思鶴よすゝられの
くれしや此をひけひつれて大原に
いきやひ遊てもとれ

思なひ

- 一 てかよおめけひよ大原にいきやひ
稲ひろて遊は粟ひろてあすは

遊子持心し

- 一 いやうひくなくなやうわか按司の

【030右】

飛御衣我按司の舞御衣六侯の
蔵に八侯の内に稲束のしたに粟
束のうちに置ふるみしちやうん
おきさるししちやうんねなし起て

啼なやうなかならなくひゆんたう
遊ははとくひゆんたう

思なひ

- 一 やあおめけひよ頼て夜もくれる

【030左】

急ち立戻てすたし母親の側に
をらに

天女

- 一 なし子もり素立をらんでやりすれば
天の御定め我自由ならぬ互に
なれそめてなし子わなひふたり
姉のとしよめは九つになよひをひ
けひとしことし五ついつきやても

【031右】

をてもわなひならぬとはんでやり
すれば飛衣やなひらぬ此間やをたん
なし子い言葉に八つ侯の蔵にもく
かくしかくちある事よ聞はけふと
とまひつきやるけふとわなひとたる
明日も明雲にあちやのしら雲に
飛のやひのほらとひのやひいかに

【031左】

東江ぶし

— なし子ふやかれて飛んでやりすれば
明日やはとまひてなきゆらとめは

天女言葉並東江ぶし

— ねなしちをるうち別れらなきやしゆか
おすてもすかりすかるとめは

思けひ

— やあ母親よ——やあ思なひよ

母やをらぬ

思婦思けひ

— やあ母親よ——

— やあ思なひよ母親やあれよ——

【032右】

【032右】

此事よ聞は此事よしらはもゝ
すかりすかてはなす事ならぬわか
なし子すかち急ちねなしめて
夜明白雲とつれてのほらやあ
やあなし子今日明てあちやゝおし
つれて遊はいへも片時も急ち
ねれよ

思なひ

— やあ母親よいきやしかなけふや
母親の側にいへも片時も離れ
くれしや

思けひ

— わぬも母親の側にねらふ

天女

— やあなし子急ちねれよ——

天女

— かにある憂苦しやたかしちやかことや
つらめてもきやしゆか我肝さざめ

【032左】

東江ぶし

— なし子ふやかれて飛んでやりすれば
明日やはとまひてなきゆらとめは

天女言葉並東江ぶし

— ねなしちをるうち別れらなきやしゆか
おすてもすかりすかるとめは

思けひ

— やあ母親よ——やあ思なひよ

母やをらぬ

思婦思けひ

— やあ母親よ——

— やあ思なひよ母親やあれよ——

【033右】

思なひ

— やあ母親よ思けひとわぬすてゝ
まかひいきゆか

まかひいきゆか

思けひ

— わぬも列登らやあ母親よ——

天女

— 是きやてよとめは飛もとはれらぬ
なし子ふやかれのもゝのくれしや

— やあ思なひよ母やしら雲の

かくち見らぬ

東江ぶじ

— あきやつおめけよ母見らぬ

思なひ

— やあ思けひよいつきやてよなきゆか

互に立戻てこのことや急ち父に

かたら

思けひ

— おめなひや急ち戻よりはもとれ

わ身や母とまひていかんしゆもの

— やあ思けひよ母やしら雲のかくち

自由ならぬ明日や押列て互にとまいら

けふや急ち立戻て父にかたら

てかよ

子持ぶじ

— 思けひとわ身や生れらぬむまれ

十にたらぬうち十にみたため内に

母にすてられてわかれやひをれは

【033左】

五つ頃をひけひ一期啼くらち

ねふる夜もねらぬたよる物はなち

互に母おもてたかひになきくらち

すくられもくれしやすからても苦しや

思けひよつれて母とまひて行ん

足まるひするなつまころひするな

こかときやてとまひてこかときやてきぢま

母親や見らぬ母親やをらぬ

夜もくれていきゆひ足本もやめは

ひきゆる足ひからぬ肝くれていきゆん

思なひ

— やあ思けひよ此間のつかれ足も

ひかれらぬ日本くら

しんき

思けひ

— やあ思なひよ足まるひするな

急ぎ立おけれ

のかすのかす。思なひやものい

【034右】

【034左】

【035右】

【035左】

声もすらぬ

銘迦子

一 あゝ肝もきもならぬかにくれしや

あるい五つ頃をひけひ十にたらぬ姉

母に捨てられて別れやひをれば

ねふる夜もねらぬたゆるもの

【036右】

はなちあの松の下にあの川の本に

朝夕いきくらち足すとてなれば

肝もきもならぬけふや夜も暮る

急ち立寄ひわかなし子すかち列

戻ていかに引つれていかにやあ

なし子夜も暮て行んいそち

たちもとれ

【036左】

思けひ

一 やあ父親よすたち母親やとま

れはもをらぬおもなひとわ身や

いきやかしゆゝら

銘迦子

一 やあ思鶴よたによ聞留れけふからや

明日からや母の事思て泣よ又するな

すたしはゝおやゝ世界の人あらぬ

あまおりしやる女あま下りしやる

女天登てからや下ることならぬならぬ

事思て泣くらちをすや母の為

ならぬ我が為にならぬ思けひよ

すかち互におひたちやひ首里みや

たりしゆすと按司みやたりしゆすと

子の道たいもの親の為やことたによ

きゝ留て肝に思染てけふからや

明日からや母とまひてなくな母呼ひ

なくな

【037・038左】

思なひ

一 やあ父親よ思尽ちをても此世をて

母にまた拜むことのならぬてよやれば

いきやし暮しやしゆゝか思けひと

我身や

銘迦子

一 い言葉にわぬも面影のまさて

【037・038右】

つらめてもきやしゆか我肝さらめ

【039・040右】

上使

一 出様ちやる者や首里の御使あゝ

銘苅子とちやあまおりしやる女

天の御定め自由ならぬあたら

五つころをひけひ十にみたぬをなひ

ふりすてゝ今や飛うせてをらぬ

親とまひいまよて高松の下に

【039・040左】

朝夕つれ行ひ啼暮ちをんてやり

首里城までも取沙汰のあれは

思なひや御城の内御素立よ

めしやいん思けひやほとゝにならば

御取立めしやいん御素立よめし

やいん又親の銘苅子や首里の

御位たへめしやいんてやりこの

【041・042右】

みよんき拝てなまと行る高松の

本も道すからたひもの直に立

寄ひたつねやひむたに

同人

一 やあゝ銘苅し首里の御使と

やゆる

銘苅子

一 あゝのふことがやゆら

上使

一 銘苅子かなし子母にすてられて

【041・042左】

朝夕親とまひて啼暮ちをる事や

首里城までも取沙汰のあてと

世にかはてをれば世に始やこと

なし子思鶴や御城の内に御素立

よめしやいん嫡子龜千代やほと

ほとにならば御素御取立めしやいん

又銘苅子や首里のおゑかたへ

【043右】

めしやいんていやりの御使とやゆる

銘苅子

一 あゝたうと夢やちやうもむため

もゝかほとつきやるやあなし子

みすく聞拜め此御恩たうと

さや胸に思染れ肝に思留て

けふからや明日からや打笑て遊へ

うちほこて遊へ大原とやゆる先

宿んかいおんつかいしやへらたう

かほ事とやゆるすてことよたひ

もの押列て宿に踊て戻ら

立巻ふし

一 夢やちやうもむたぬ百かほのつきやす

あの松と川のゆへとやゆる

同ふし

一 百かほのあれはあの松と川や

むかしくりもとち見ほしやはかり

大川敵討

谷茶之按司金入錦之入道頭巾向に

金磨之籠之角飾有る太刀刀茶色緞子

羅陣羽織錦之飾有る脚胖足袋大団

金入綿之細帯石川満名黒纏子入道

頭巾向に金襴にて飾有る黒細袷衣裳

刀脚胖足袋門番黒西洋布入道頭巾

【043左】

【044右】

黒木綿単衣裳脚胖足袋差縄

【044左】

きやうちやく持黒木綿単衣裳脚胖

足袋若按司かしらひ板ノ縮緬振

袖単衣裳足袋風車こふすい村原

黒纏子入道頭巾向に金襴にて飾有る黒

紗綾袷衣裳輪子広袖羽織刀太刀

足袋物売之時黒輪子入道頭巾編笠

細物加籠に入付陣賦之時羅陣羽織甲

胸当脚胖金之魔原国兄弟長刀

【045・046右】

半向頭巾緋花巻つ青銅桐衣脚胖足袋

中人より入道頭巾綿村原母並妻かもし

紫長巾金銀水引熨斗作花助巾

琉縫薄衣裳足袋妻谷茶城に參

る時女笠杖持歸り候時長刀母黒地形付衣裳

満名の子瀬底下こおり西川の支^ヌ喜瀬之

大屋子四人黒西洋布入道頭巾黒木綿

単衣刀脚胖足袋泊井緋西洋巾

【045・046左】

黒木綿衣裳脚胖足袋陣賦之時

黒西洋入道頭巾村原子緋縮緬衣裳

一 出様ちやるものや、大川の按司の頭役村原のひや、今帰仁の城御使にいきやひ、戻る道すから聞は腹立や、あゝ谷茶あまやか野心事巧て、のゝ事も思ぬ大川の按司の、国々の按司部討たんでやりしゆんで、島々よ廻て段々にいなち、加勢頼入軍押

寄すて、俄事やれば分別もならぬ、

多勢に無勢力及はらぬ、按司や討死思子の事や、あゝ口惜や敵の生捕やい、按司の跡つかち御素立よてやり、欲悪なやから慈悲の肝飾て、此村原が有

難さ思て降参よすらは、思子諸ともに打果さむての計ひとやゆる、あゝ心れてとをゆる仕合しとやゆる、大川の御運

世に残てをれば、いきやしかな思子取戻ちからに、時節待受て敵討んともて、村原か命ちなからへてをゆん、あゝたつと神仏そろて助やひたはふれ、

【047右】

【047左】

村原の母妻子出羽敷山ふし

一 まことかや実かわきもほれ——と
ねさめおとろきの夢の心地
一 三人の者や大川の按司の、頭役村原の母やとちなし子、谷茶あまやか野心

【048右】

事巧て、のゝ事も思ぬ大川の按司の、国々の按司部討んでやりしゆんで、島々よ廻て色々に云なち、加勢頼入軍押寄て、按司添と共に村原のひやも、討死よてやりしら。へのあれば、夢現心肝もきもならぬ、無常の此世界やかにもあるひ、やああや前よ、なく泪。ともになひほしやとほしやとあすか、忍ひ隠れ

【048左】

とて一人子之松かや、取素立——人になちからや、親ふしの跡や継しほしやの、
たう——落る露泪も押はらへ——、
御気張よめしやうれ御供しやへら、

母
一 いらぬ年寄の長生はしちをて、あけ

やうこの憂目むるか心気、
通ももろともになら
んてやりすれば、朝夕手
はなさぬ玉の乙松か、
花のおもかほの名残立
増ていきやしわすれゆか
あの世までも、

【049・050右】

乙種
一 いらぬことめしやうな後
れてや済ぬ、氣にまかち
三人諸共にならば、村原
か跡に残る者をらぬ、乙
松よ素立程程になさは、
君親の事もすらな置め、
たう、御氣張よめしやう
れ御供しやへら、

【049・050左】

仲間ぶし
一 あたら人間に生れやひを
すかやす、とくらすひま
もなひらぬ

乙種
一 のゝ罪のあたかつれなさ
や三人、

母
一 あげやう忍はらぬ心へら
聞に、

道行なかなりふし

乙種
一 ゆきまよひ、

乙種
一 いく先やしらぬ野山さ
くひらも、

なかなりふし

乙種
一 たゝあしにまかち

乙種
一 かゝる方なひらぬ行来
しら玉の、

【052右】

母
一 露なたやあられ雪もふ
り増て、

子持ふし

乙種
一 冬の山嵐やあし本もつ
まて

乙種
一 肝もきもならぬあげや
ういきやなゆか

乙種
一 御氣張よめしやうれ頓
て夜も

あける、

母
一 肝おすていきゆんしは
しやすま、

乙種
一 やああや前よ、

同人

一 此子たちをればすと親のことも、肝の

俣ならぬ急ちいそからぬ、うつかつと

しちをて敵におひつかれ、三人共憂め

むたよいやとて、此子ともすて、

身すからになれば、すと一人かことや自由に

なゆん、一 義理の道たひもの思

きらなくゆめ、やあ乙松よ、わぬことる

親になさつたる因果、是まてよたひ

もの母の面かふも、夢現心起てむてよ、

あけやうあてなしの、ことともおまぬ、

哀れ案々とねるか心気、やあ

乙松よ、誠後生あらは、父親の側に、先

立ひむちをてまちやいをれよ、やあ

乙松天の引合しに情けある人の、素立

やひ呉らは主人親ふしの、跡方は頼て

尋ねやひ呉れよ、あゝたちうつ、神仏

そろて見守やひたはふれ、思切ひ

【052左】

をすか誠つらむては、我肝忍はらぬ
やみになゆさ、

東江ふし

一 わきもしのはらぬ闇になゆさ

乙梅

一 やああや前よ、頓て喜名村やたよひ

島たひもの、御気張よめしやうれ

御供しやへら、やああや前よ、

母

一 肝もきもならぬしはし休ま、

村原

一 是や村原のひや、義理のませ垣に

かこまれてわ身の、浅ましや露の命ち

やすか、思子取戻す念願のあとて、ねふる

夜もねらぬ忍てまわる、こねや夜

深さに童へ鳴声や、いきやしちやか

事が立寄ひむたに、やあ乙松、あゝ

身にかへて朝夕撫素立しゆたる、この

一人子やすかみたれ世になれば、哀れ

このなひになすか心気、母と乙梅も

【053右】

【051左】

【053左】

行来しら玉の、露霜と共になたら
とめは、あゝ浅まじや、いや、無常の
此世界の習ひやしらね、おくれてや
すまぬ先にかゝら、

乙梅

— やああや前よ、

村原

— やあ、かにある雪降にこかと

山道に、いきやしちやる事が二人の者や、

乙梅

— 首里からとやすか旅の上の習や、

【054右】

村原

— やあ母親やあ乙梅

母

— やあ村原、按司添とゝもになる筈の者の、
主の恩忘ひ孝行の道しらぬ、のゝつらの
あととまいてきちやか、浅まじや村原
命のあたらしやひ、妻子のなさけ
しのはらぬあため、

村原

— あゝめしやいること、按司添と共になる筈
とやすか、思子の事と敵の生捕やい、

【054左】

村原も共に打果さむての、分別は出ち
いこと葉は飾て、過し按司かなし跡
継の思子、御素立よてやり語り部
のあれは、いきやしかな思子引取ん
ともて、村原か命ちなからへてをゆん、

母

— 今のことやれは誇らしやとあゆる、

肝にきもそへて念の入れよ、

村原

— 村原かいきち此世界にをとて、思子

【055右】

取戻ち敵討な置め、あゝ思ひ世に残ち
死やならぬ、やあ乙梅、いきやし乙松
すてゝあたが、

母

— 咲出ゆる花はわ身に思かへち、のゝ
肝のあとて捨てあたが、

乙梅

一 大川の城仕合の時に、按司添と共に討死によてやり、語ひへのあれは、沙汰よ聞及て、三人逃忍てこまゝてやきやすか、親かなし事やなれぬ山道の、さくひらのつかれ足本もつまで、急ち

【055左】

いそからぬうつかつとしちをて、敵に追つかれ三人共憂目、むたよいか逆も哀れなく、も、すとおやのためにすてゝあたん、

村原

一 あゝ此上とやすか誇らしやとあゆる、
またも世に出る運のめくひ

乙梅

一 やあ、思子の事や御格護よてやり、聞は、嬉しなや仕合とやゆる、

我身に思つきやる事の又あすや、あん前に名付忍てむちからに、命救てたはふれてやり誠たん、と、

【056右】

村原

色々にいやは、欲悪な谷茶巧てをることの、便りはしともて疑ひやなひらぬ、抱置積り、我肝落着やい心ゆるさしやい思子守なつけ引とやひきやへら、

【056左】

乙梅

思子為てやり女身はひちゆひ、敵の手にやらす事やならぬ、

一 女又やても男またやても、思子のために肝やひとつ、

乙梅原^又₁₀

一 肝の上の事やおの筈とやすか、氣にまかちすにゆめ義理のならひ、

乙梅

一 義理の道てすも君親の為に、肝尽す外の事やなひさめ、

村原

一 村原か生ち此世界にをて、思子為

【057右】

てやり義理の道曲て、女あてなしは
敵の手にやらち、末代の恥辱面目や
きやしゆか、曾て此事やゆるす事
ならぬ、

乙樽

一 いちもやく立ぬ事す又やはわない、
女やても谷茶あまやに、一刀も掛て
討死はすらに、徒に命ちなからへて

のしゆか、たう——ゆるちたはふれ、

母

一 あゝ事あらくするなやあ乙樽、思子
為やれはおの善とやすか、事あらく
しちや仕損しの基ひ、思子までかゝて
大事あらんしゆもの、細々とまたく
はからやひくひれよ、

乙樽

一 肝ぬるさしちをて若か谷茶か手段
引替ち思子の上に、あらし声のあらは

願てをること、思てやくたゝぬあたと

【057左】

なゆる

村原

一 やあ乙樽、女只にちゆひ敵の手にやらす、
きもの忍はらぬあてと断やしちやる、
今の心さしいちも尽さらぬ、誠村原か
とちの本意、此外に手段分別もならぬ、
たう——念に念添て気張て呉れよ、

乙樽

一 思た事こと叶てほこらしやとあゆる、命の

あるかきりこゝろつくさ

【058左】

母

一 やあ乙樽、思子為てやり命ちふり
すてゝ、今のこと云すや誇らしやと
あすか、行先の定めさたまらぬ
あれは、あけやう思尽すかたもなひらぬ、

乙樽

一 人の願事にあたに又なゆめ、こゝろ
安す——と御待めしやうれ、

村原

一 やあ乙樽、あらく掛引も有積り

【058右】

【059右】

たひもの、腹立ぬことに心しつめとて、
いこと葉に応し取廻し、請
答よぶ了簡よすれ、

乙梅

一 我胸に留てわか肝に染て、仰す

事まゝに念のいらに、

村原

一 若か事洩てならぬおの涯や、別に計とる
手段又あもの、後れらぬことに切巧てをる次第、
親子此三人隠とる段、一々細々白状よ

【059左】

すれ、あゝ繰返し、又事とやすか、互に
面目や失なわぬことに、思子引とゆる
要目ところ、あひ能々分別題目と
やゆる、やあ乙梅、やく立ぬ、我身の
とじなたる因果、あゝ口惜や、

乙梅

一 たとひ事洩て生殺しされて

てやり、思子為やれは残る事なひらぬ、

心安す、と極楽とやゆる、

【060右】

村原
一 あゝいふる事よきは肝にひし、と、
むかし物語り聞ゆることに、よの中の
手本沙汰と残る、

乙梅

一 此子乙松や御素立、めしやうち、人
なゆることに計やひたはふれ、

村原

一 念遣するなおの素立しゆもの、
すと子の事や、氣遣するな、

乙梅

【060左】

一 やああや前よ、頓てわか思子をかて
こんしゆもの、肝願よしちをて御待
めしやうれ、

母言葉並伊野波ぶじ

乙梅

一 義理のみちやれは止てとめららぬ、

乙梅

一 よ所しれてからや大事あらんしゆもの、
急ち立戻てまちやひいまふれ、

伊野波ふし下句

一 のかすどくかにある夢の世界や

乙梅道行金武ふし

一 胸にものおめは歩む道ほとも覺ら
すにつきやさ本の城

乙梅

一 覺らずに谷茶城元につきやん、物め

つめしちをて案内よすらに、やあ

御取次頼まものしられしやへら、

門番

一 はあ、無作法、内原にいきやひ

御取次しやうれ、

乙梅

一 やあ、我身や大川の思子虎千代が、

乳親とやゆる守あんとやゆる、大川の

城仕合の時にははてさま逃てかくれ

やひをたん、かゝる方なひらぬすかる方

なひらぬ、聞は御慈悲あて守素

立思子、御素立のあんで音信よ

【061右】

【061左】

をかて、思子諸共に命つかんともて、

よしれやひをもの頼て御情に、

御取次めしやうち助やひ給ふれ、

門番

一 はあ云ることよ聞は、無威なもの、

たう、むまに待ひをれよ

同人

拝れよめしやいんあれに居やうれ、

谷茶

一 やあ、大川のなし子乳母てる女、

いきやあれはずにゆか考てみやうれ、

溝納

一 され按司かなし、大川のなし子引取ん

てやり、村原の比屋か計ひとやゆる、あ、

あれふとの村原も運の末なれは、

わにやかかけの内に首いれる仕形、こまや

案々と足たくてをとて、村原のひやか

計事便て、村原からめゆる時節きやあ

へたん、切々御果報系い事たやへる、

【062右】

【062左】

谷茶

一段な事よ、やあ石川のひや、へつに了簡のあひかしゆら、

石川

満納いやれること、一々尤同意たやへる、

谷茶

扱も、分才もしらぬ此按司に向て、すひさんなやからゆるす事

ならぬ、急ち引出ち賣のあるかきり、

せめて有筋白状よしめれ、

石川

扱むちゆめやへて、やあよしれとる女出す、

下郡

さあ、御前寄て扱め御側よて扱め、

満納

やあ女、得と肝ゐして慥にきけ、おかたちか巧みたくてをる事や、尋らぬ

先に合点とやゆる、直におの科に当る

善やすか、科もかんすらぬ賣もさぬ

【063右】

【063左】

ことの、御慈悲ある天の御情のあとで、

村原か行衛おんにゆけやはは、巧てをる

事のおの科もゆるち、島知行もとち

引はらふしまても、おの御肝きやへ⁴や¹²

ある善よたひもの、御情の御肝みすく

取請て、肝われて実におんにゆけやうれ、

同人

あゝ好てこのまらぬ天運のめぐり、

勘違するな、

乙樽

村原か事や討死かしちやら、音信もなひらぬ

沙汰もきかぬ、女あてなしののゝ思のあゆか、

命のつれなさに按司かなし天の十百歳

のおかほかめ願よしちをて、御情に自身の

露程の命ち、いきやしかなともて

よしれやひをもの、色分てたはふれ

天の御肝、

満納

いや、かくしゆらは隠すつゝみゆらは

【064右】

【064左】

包め、肝のあくまゝや責の有限り、おの責に当て聞答とやすか、責られてからにおんにゆけやは、科の上に科や重ならんしゆもの、せめららぬつじにおんにゆけやうれ、

乙梅

一 のゝこともおまぬ女あてなしに、罪科よかけてうきくれしやしめゆすや、村原がしわざ恨めてとをゆる、のよて身にかへて

【065右】

実よかくしやへか、此事やつく〜とおもてたはふれ、

満納

一 勘違するな不堪ともするな、殺される科も兼てしりなけな、責の上に
向て偽やならぬ、有筋にいちゆて
殺される者も、昔から今に数やしらぬ

乙梅

一 村原が行衛夢程もしらは御尋の
先におんにゆける積り、のゝおめの

【065左】

あゆかわか命の外に、のゝ思のあとで隠ちをゆか、御言葉に応したゝこともないらぬ、御返事御返答につまてをゆん、

百川

一 はあ勘違するなとんなこといふな、縦命限りあらはすなてやり、堅談合もしちあたんでやりか、満納いやれること責のねつられぬ、たう〜、今のこと細く真心にいやれば、百すてや

【066右】

あらね美拜をかてからに、みすく取請て包ますにいやうれ、あゝ百果報や目の前引よすてをとて、人の為に
あたらのちとてやすまぬ、人間の願のゝおめのあゆか、思てやく立ぬ
村原もすてゝ、天道のなし子真肝
うちわれて、生れたるしるし樂
よすれよ〜、

【066左】

石川

一 さあ——おんにゆけやうれ——

乙梅

一 村原かなんとやから者やても、網の

魚心只ひちゆいものゝ、こへな御城に

弓引のなゆめ、たとひ生残て

かたすみにをても、天の御定のくる

間の命ち、海山にかゝつてつくまてと

やゆる、あゝ按司かなし御始石川と

満納、島国よ豊む人々とやすか村原

のひやゝ鬼のことめしやうちいきやし

おれほともおとろしやよめしやいか、

谷茶

一 むゝ尤な不審尤な事、やあ女愁悲情

尽ち大川のなし子、素立やひあすかもしか

村原か、いらぬ義理立て謀叛企たは、大川の

なし子生て置ならぬ、誠心実もあたになるやれは、

村原も共に素立ふしやあてと、細く

問尋ねしゆることよたひもの、守子

【067右】

【067左】

為ともてかくさすに語れ、

満納

一 いや、此上に又も隠しともしゆらは、又事も

いらぬ直に引立て、すねの碎けらは胸

腹よまても、命の有限りはさみきら

しゆもの、たうおのこゝれしちをて

おんにゆけやうれ、糸ひ差繩持ち

近く寄てをとて、又も隠しゆらは吃と

こむせめれ、

下部

一 さあ——おんにゆけやうれ——、後てや

すまぬ急ちおんにゆけやうれ、

満納

一 いや、おなためもしらぬこゝてをゆめ、

のゝこともしらぬ女あてなしに、段々の

御問こと御難儀とやゆる、いちもやく立ぬ

是非に及はらぬ、誠正直の我胸の内や、

責てせめころちあとに御目掛け、近き

拜まれる天の下をとて、偽のなゆめ人の

【068右】

【068左】

肝の、一 はあ、つらつきも替て悪魔
やな女、夫喰る悪生切支丹、鬼むちやる
人の此世界にをゆめ、是と鬼やゆる
さあ、
吃とこむ責れ、

下部

一 せめられるこの深さある女、いきやか

乙梅

殺される事や露程も思ぬ、思切ひ

をすかのゝこともしらぬ、女あてなしは

【069右】

鬼無理にせまで、責殺す罪のわか

ために廻て、按司かなし上にいきゆら

たひいとめは、死ゆくもはや気に

かゝていきゆん、

谷茶

一 はあ云る事よ聞は理りとやゆる、

繩も掛らすに責もさぬことに、義理の

上の勝^マ あらんしゆもの、たつ、
せまで

ある繩も急ちときゆるす、

乙梅

一 あゝたうと、此御恩たうとさや女身の
わぬも、よしれやひをれば若か村原か、
生残てをとて思子御素立の、事な
とも聞は、我身よりも増て、時日移さ

すにうち笑ひ、よしれらな置め

人の肝の、御慈悲御情とわ御主

かなし、百とまでちやうわれ拜てすてら、

清納

一 いや、からすよも女たまそとも、

【070右】

いきやし此満納たまかしのなゆか、

そんちむち卒にたゝちむちおけ、

谷茶

一 いや、あたまをてものや念入に

しちおて、仕損してからや悔てやく

立ぬ、思案より外の事やなひさめ、

たう、事急きするな短気するな、

扱も、高程もおちやて目口

やは、と、雲のしらはくき物云

【069左】

【070左】

さし聞は、こいんから替て花の清ら女、
見れはみる毎におめと増る、我が側
におきやひ互に染々と、夢のこの浮世
暮しほしやの、誠真実の、我肝とも
呉らは、村原か事もいやに置め、石川と
満納追ぬけてからに、わ肝明々と談合よ
すらに、やあ、此事や互におかと
しちすまぬ、けふや立別て思案しち

【071右】

からに、思ひきはまらは呼す答たひもの、
戻てみち得と考てみやつれ、

満納

一 めしやいること、ものやひとかたにおかと
しちすまぬ、あの女てすや村原かとしの、
乙樽よてやりたゝならぬやから、女てやり
おかとゆるち置ならぬ、賣らすになんと
尋たんだひか、愚痴の上に愚痴やかた
まゆる積り、牢に込置ておのくつさ

【071左】

しめて、引出し、おの責にあてゝ、漸々

と氣根疲ゆる時と、有筋に白状

しゆる積りやれば、御思案の内や
こめておきやへら、

石川

一 満納思寄も尤とやすが、牢こめも
いらぬ責もさぬことの、御慈悲御情けの
按司の御計や、いかな悪欲な無理な
ものやても、背く事なひさめ義理の上に、

【072右】

たう、先牢こめやゆるちおかに、

満納

一 いや、村原のひやにならぶものをらぬ、
巧てをる事やいか程かやゆら、おかと
しちすまぬ女わらへ、

石川

一 我々の一事はからやいをれば、按司や
百ことの御計のあゆん、

満納

一 はあ、主人身の上の浮沈みやれば、
肝のあくまゝや命ち限り、あゝ

【072左】

おとろしやもしらぬみよんにゆけや
やすか、責さしゆることの御肝きやさ
あらは、大川のなし子あのやからものと
姿から形ち似ちをるもの撰て、大川の
なし子てやり取沙汰よしめて、外の
出入もゆるちあんでやり、村原か聞は
疑やなひらぬ、はいとらんともて忍て
来るつもり、おの手段しちをてからめとやへら、

【073右】

谷茶

— 細事のたくひ聞きやくもなひらぬ、

満納

— あゝ按司かなし天の盛衰の此涯よ

やれは、包てつゝまらぬ、おとろしやも

しらぬ繰返し、みよんきことがへそ

科や仰すめしやうち、是非共牢舎

仰すめしやうれ、

谷茶

— 推参なやから愚痴にかたまとめ、又

事もいらぬなけすてとらさ、

【073左】

石川

— 此涯よたひもの御勤忍めしやうれ、

谷茶

— やあ石川、わか下知に背く氣任の

やよ¹⁴ら、急ち引立てそんちいけ、

石川

— やあ満納御意背く道の此世界に

あゆめ、おれこれも按司の御計に

まかち、仰すことまんに急ち戻ら、

谷茶

— やあ、振合の袖に糸の縁結て、夢の

間の浮世語ひほしやあもの、わか側に

をとて楽よすれよ、

【074右】

乙權

— 御情に御側をらんでやりすれば、おやく

めさあもの御ゆるせよめしやうれ、

谷茶

— いや、やくめさもいらぬ斟酌もするな、

わ側とををらは花に増姿、おの飾しめて

をなちやらもされん、島国よ描てあか

めらんしゆもの、たうく 側にをれよ
をれよ、

【074左】

乙梅
一 按司もわなひすかぬ楽も又すかぬ、わすた
つれやても女身の習の、義理曲て
なれる道のおゆめ、

谷茶
一 いやく、今のこと愚痴にかたまこるむさや、
素立ひやならぬ急ち戻やうれ、

乙梅
一 こまかくて命やつかなれば死にゆめ、もの
乞になてものちやつきゆん、たうく
ゆるちたはふれ、

【075右】

谷茶
一 いやく、義理と按司やゆる無理
な事めしやうな、

谷茶
一 いやつの按司の言葉きかならばそなた、
一刀に命ちつぶちとらひ、

乙梅
一 殺しゆらは殺すおとろしやくひらぬ、
生々と命の死もしにやれらぬ、恥も
ふりすてく此なひになとる、露程の
いのち惜む事ないらぬ、仕合とやゆる

【075左】

ころすく、

谷茶
一 はあ肝ほれてをたら今のことしやすや、
無調法至極ゆるちたはふれ、神仏
てすも人の肝尽ち、祈る願事や御助
のあもの、みすぐ聞分て肝もきも
そへて、頼て御情になれて給ふれ、

乙梅
一 おはつかしやあてもいやな又なゆめ、わか夫や
此世隠れやひをらぬ、遺言しちあすや

【076右】

三年の内に、夫もとなてやりい言葉の
あゆん、三年やたひんす女身の習の、
夫ふたりもちゆる道のあるひ、

谷茶

一 昔ほれものゝいちやること守て、浮世

くらざれめ按司も下司も、恋忍ぶ

道のある間の浮世、つらさ身に受て

思ひ忘れやひ、恋死はむくひたるに

いきゆか、たう——おれこれよおもて

死にゆる我が命ち、頼て御情に救て

たはふれ、

【076左】

乙梅

一 思ひ究とるわ身と又やすか、按司の御言葉

や梓弓心、引されていきゆさわ身の肝や、

谷茶

一 はあ果報もつきゆすかどつきま

付清さ、あた果報とつきやる果報な

我身や、はあしたひ——

乙梅

一 来る二月にすきし我が夫の、三年忌

たひもの弔や済ち、よしあしの御返事

おしやけんしゆもの、おの内や是非に

【077右】

御待めしやうれ、

谷茶

一 いや——是やならぬ——

乙梅

一 おれこれもゆるしならぬことやらは、

逆も一刀に殺ちたはふれ、

谷茶

一 はあおれはもよたしやいつまでも

まちゆん、いやれること済ゆんよたしや——

【077左】

乙梅

一 あうたうと、御情の光てり増ひ——

百といつまでも拜てすてやへら、

谷茶

一 あゝ我身もほこらしやの物にたとららぬ、

このたけにわ身やなやかやいをても、

氣に叶ふ女、側にまたをらぬ、是とわか

ふ足心くら闇になやいをたん、今月も

過て二月も頓て、おれからや互に枕

うちならへ、浮世楽々と暮すとは、

【078右】

まちと嬉しことよろこひもおへさ、天もに
飛登るわ身の心地、引寄て給ふれ
御月御てた、我自由しち浮世遊て
暮さ、一やあ、此内やとかく
くつさしちをたら、心はれ、とつち
晴て踊て、此間のくつさ思ひ忘れ、

こてぶし

- 一 御慈悲あるゆへと御万人のまきり
上下もそろてあふきおかむ

谷茶

- 一 はあきよらさ、

乙樽

- 一 けふや思子の御側むちをかて、
明日か日に又も拜てすてら、
一 たう、けふや道中の草臥もあら
たひもの、若按司の側にむち休足よ

村原出羽大浦ぶし

- 一 すれ、思子取戻ち敵つたんともて
哀れ商人にやつれ出る
一 是や村原のひや、思子取戻すつまひ

【078左】

分別に、乙樽かことやあむまへになつて、
敵の城元に只ひちゆひやらち、あ、心
元なさの我肝やすまらぬ、物売にや
つれ忍て出る、

さんそるふし

- 一 唐や大和の珍らし物匂ひ髪附香し
もの丁子白檀甘生姜刻多葉粉も
持ちをやへんきせるも宝蔵も持つ
をやへん其外色々持ちをやへん

代もやすめて上やへら米とも粟
とも替やへん御望の物やかふやひ
たはふれ

村原

- 一 先物売に名付此辺にをとて、往来の
人の沙汰よきかに、

泊井

- 一 とんちたるものや村原のあやとむちやん
一つのちきや御葉たん、大川の思子引
取らんで村原のあや、谷茶城忍て

【079右】

【079左】

いまふちやうすか、夫の村原なひ肝要
なものいやひ頼まつて行ん、油断しや
濟ぬ先一足もいそかう、

【080右】

村原

一 され、万細物持ちをやへん、これ

御望の物や売上やへら、

泊井

一 あゝ是や仕合な事、

村原

一 田舎^江御通の御支度の御様子、御

中途の御用是々又是も上やへら、

【080左】

泊井

一 是や心入とやる、いやれること^{ママ}谷^{ママ}屋良

村んかい越ん、道中の重宝仕合な事、

主やまあからまあんかひまひか、

村原

一 我身や那覇若狭町から、今度初て

旅の者、御急ぎもやゆら御無心も

しらぬ、取つてもなひらぬ望事やすか、

旅の上の御縁をかむ御情に、めつらしい
事の此頃にあらは、御休みのうちに

【081右】

きかちたはふれ、やとものみやけ
ものかたりしやへら、

泊井

一 まゝてひしんさあちゆのいそけは、

むゝたしかに村原のひややすか、しかつと

見覚のなひらぬ、先口ふてさくてむだう、

同人

一 あゝいきやいは兄弟のううちへたての

あか、これや余りこは返事やつさあ、

やすかかんのふも珍らしひ事や、

【081左】

なひらぬ、むゝあゝ、満納の子や打殺

さつて、あゝいたわしい事、

村原

一 あたらしか満納いきやしちやる事が、

泊井

一 むゝ、おの事は、たう細々の次第根から

咄ちきかさう、あの城や、本令帰仁の

別れ大川の按司の城やたすか、百姓

上の按司部谷茶のおまへの打亡はち、

今や谷茶城むていふん、先事のおこれや

谷茶が野心巧て、大川の按司の国々

の按司部うたんで、あさらぬ事は色々

いひ立て、加勢頼て軍押寄たん、だあ

大城川城やをなちやらの御甲の日に

当て、御取込の最中以外の、火急

な事分別の分別ならぬ、按司も大将も

えひころ討死、大勢に無勢力及はらぬ、

終にや思子や生捕られ、大将村原の

ひやゝぬけすまち行衛しれらぬ、世界

の一人者えひ武士やすんつひてや、

生捕であるいねけ子物種子にしち、

取付て降参しめらむておの思子つか

なてあん、おの段村原か聞付て思子

引取らむて、村原のあやゝあん前むて

云ち、共につかなてたはふれ

むて谷茶城よしれたん、あゝむちや

【082右】

【082左】

【083右】

満納の子なつくわひもの、かはひ人、村原か

計むてぬちやてひつしつち、此漕取付て

よんむて幸としち問尋掛引段々、

村原としもあひもおとらぬぬけた女、

いちやひしちやひ色々様々の返事返

答、扱も 寄^マ 妙な事いきゝことやて

てん、しゆたすか村原とじや目口やは

と小しほらしひかあげ、ほんのむちや

むしやものやすんつひてや、たあ按司や

ちやむとうちほれて、目いろは折しち

さらさらあと正気やならぬ、終にや石川

満納も追ぬけて、さつたる仕形の

をかしや、やあ、わか側にをらはをな

ちやらも、されん、たう、側に居よ

をれよむていちやれば、村原のあやゝ

按司もすかぬ案もすかぬむてつんはに

むはしやん、谷茶や腹きりわき、此

按司の言葉きかならそなた、一刀に

【083左】

【084右】

いのちつぶちとらさ、むてしゆておとぢやん、
わたの底まで見濟さつてをすや以の
外、村原のあや、ちやあんなひらぬ殺す
むてすひちかゝたさ、たあ殺しゆる
いきやはそつともなひらぬ、むきやわらひ
しちもとよたる仕形や、ほんのをかしやと

【084左】

おほさる、あはあ高——立羽失てどつと
さん、——な事、あんしおれからや大首
たうりて、みすく聞分て肝出ち
死しいきゆる命救てたはふれ——
むて、段々折たうれしやつとちんや、
村原としや分別なもの、夫の仏事
うちなち御返事上らののふのくひの
むて、たん——と云廻ちやれば、あゝ

【085右】

無蔵さ縁のかたかしらあかさくらさも
わからぬ、ほんの誠にたんしひきつち、
誠と嬉しことよろこひも大さ、あた
果報とつきやる果報なわ身や、なつ
くわひしち笑ひすひ——踊羽しち、

夜のねふしもねんため、ひしやの指まで
打かへし——しゆて、むな待しゆらむて
おもれば、ほんのをかしやどおほさる、

【085左】

あんしまた満納の子や度々御意見
おんにゆけゆんむて、のふ目もみしらぬ
かひはうかつたん、やつさ命人の命
てらもの云んてとしゆる、水つかゆす
よかあつまつさおそろしい畜生人、

また満納の子も満納の子、あて性も

ないらぬのふむておねほとしやち、いか身から
とやひんしゆすか、得と思てむては、しゆ

【086右】

かな——しい肝のあちしやつ所から、誠に
満納の子とやゆる、

村原

一 むゝ土の本意世の中の手本、たん

ちゆ島国も沙汰よしゆたる、やあ——

大川のなし子あん前と二人や、いきやる
いきなひになやいをゆか、

泊井

一 やつさしう、やあつかぬ、犬の縄切ちや
やうなもの、一方引なてたんちやまて

【086右】

をすんついてや、頼てぬきすまうちうち
かへされる筈、はひ嘶にほれて日やさか
たひ、たつさしう、戻てくるまで
こまんまひらは、又も嘶さうやあたうしゆ、

村原

一 やあ——日暮てをすか、あかと屋良
むらに、いきやる事やとて急ちいまひか、

泊井

一 なあやのふしやる人が、ちゆの用事問よすや、
まあかひいかわんかもてい、

【087・088右】

村原

一 細々の次第聞ほしやよあすか、いやまあ
むらの何かしやゆら、

泊

一 むまやまあたやへるか、

村原

一 わ身や村原のひやとやゆる、

泊

一 あゝさうひ押しやへらぬ、あや前の
御使西村の泊井たやへる、細々の次第
おんにゆけやへら、来る十日に思子引
取て北表の山路逃めしやいやる筈、

【087・088左】

おのおこゝれめしやうれむての御支^{マツ}と
やへる、

村原

一 あゝ天の引合か神の御助か、たう——
けふからや互に心打合ち身の上のことに
気張て呉れ、思子取戻ちかたきうち
とらは、おの御取立やあらんしゆもの、
たう——気張てくひれよ、

同人

一 むゝ是に思つきやる事の又あゆん、

【089右】

乙樽か思子取戻ちからに、迷忍ふ時や
疑やなひらぬ、谷茶あまや用心も

すらぬ、あはてさま出て追掛る積り、
おの時にまかちおのときに出て、打かへす
御運是に究たん、はあ肝要な時節
おくれてや済ぬ、急ち立戻て手組
すらに、

原国兄弟

一 なま出る二人や大川の按司の頭役

しゆたる原国のひやか、兄子松千代

弟子金松、父親の事と按司添前み

こし立、討死よてやり兼て聞及て、

君親のかたき打捕んともて、ふたり

命はまで出立る内に、思子の前と敵の

いきとやひ、村原のひや釣ゆる計得の

あとて、御素立よてやりかたへ¹⁸の

あらは、此事や急ち村原につけて、

思子の前とりかへち敵討んともて、肝勇み
いさてむちていきゆん、

播口説

一 家の譲りの長刀を打取なをして

【089左】

【090右】

ころ——とこれれ——と振立てた、
きりひらちわつて入水もたまらぬ
谷茶が首打落すその手並み当る
ものなき其威勢扱も——と一声に
てきや味方の目をさます

【090左】

松千代

一 やあ金松よ、急ち内いやひ村原のひや

金松

拝ま、——たう——急ちをかま、

村原

一 出様ちやる者や村原のひや、あゝ寔慈悲

なさや我按司の報ひ、天の引合か神の

御助か、思はずに武運打重ね——散々に

なとる人々も揃て、願たこと叶て誇ら

しやとあゆる、やあ——、揃てをる人数

出やつれ——、

【091・092右】

村原

一 やあ——、乙樽が兼て内通のことに、かたき

討取ゆる御運廻り来て、けふのよかる日に

立よ出ら、一 こつきやうの時節おくれ
てや済ぬ、片時も急ち御供しやへら、

村原

一 たう、手賦の次第とつけ渡さ、やあ

喜瀬の大屋子や、敵の城元に忍て行

をとて、乙樽か思子奪とやい逃る、御中

途のけいこ念の入れ、又西川の子や、頼て

【091・092左】

ある加勢けふの真夜中に城の後ろ

の山に伏よかくれ谷茶あまやか城

立出て、北の山路いきつきゆる時は、

一時に出て門開て、大川の御旗

差立ておけ、やあ瀬底下こおりや、

北の山路の先にかくれとて、谷茶

あまやか走通る後に、道の口立ぶさち、

山路真中走通る時分、螺や石ひや

【093右】

うちならし、島国も崩す氣を

立て、若谷茶あまやか逃戻る時や、

唯並切にうちよ留れ、原国の兄弟や、

山道の中に伏よ隠れとて、先の石

ひや螺を相図に踊出て、双方のきんそ

中に引包て、あますな洩すな討よ

とめれ、やあ泊井や、先立ひ忍て

むちおとて、乙樽か思子引取り逃て、

【093左】

半里程いかは城走登て逃忍て行す

見付たんでやり、誠たん、と高らか

につけて、谷茶石川さそへ出からに、

北の山道に案内しやしやうれ、やあ

やあ、揃ておる人数慥にきけ、同輩

の中不和にともならば、怪我事の墓ひ

事障りたひもの、腹の立まゝに短氣

するな、さあ、能々勸忍題目とやゆる、

【094右】

惣人数

一 拝む留やへて、

村原

一 はあ揃ておる人数肝合ちをれば、誠勝ち

軍疑やなひらぬ、たう、手配の通油断

するな、さあ、急ち立向ていそち

打立に、

乙權思子引て逃走はや作田ふし

— おそ風もすたしや風車とくもに
押つれて互に遊ぶうれしや

乙權

— 思子取戻ちすき間はからやひ、むち入

の人にましり、出ん、

【094左】

喜瀬

— 喜瀬たやへ¹⁹ 御供しやへら、

泊井

— むくにや時分たひらう城走のほど、

谷茶石川、誘ひたさう、されくく大川の
あむ前や、思子引取て北表の山路
逃めしやいやひたん、

谷茶

— あゝ初もくく、やあ石川のひやくく、

石川

谷茶

— ふう — 大川のなし子盗取て逃る、

【095右】

急ち追つけて奪取らに、さあ

くくいそけくく、

石川

— やあくく、大川のなし子盗取て逃る、
急ち立出て御供しやうれ、

谷茶

— いや供列もいらぬ急けくく、

同人

— あれよくく、恩義忘却情切やから、

乙權

やあくく、村原よ始原国のなし子、思子、
御返に忍てきちおゆん、此間の恩に

【095左】

つける事たひもの、急ち立戻て
命ちとるな、

谷茶

— いや仕合とやゆる村原もともに、

乙權

— 寄よりはよすれ切はたちとらさ、

村原

— やあ谷茶欲悪の報ひ武運つき

はて、村原か前に廻てきちやめ、

同人

— いやぬかすまひ、

原国

— やあ谷茶、原国兄弟が待受てをす

しつちをため、

谷茶

— いや、ちゆつかぬもたらぬすひさんな

わらへ、

兄弟

— ひやひやひ

同人

— 谷茶あまやや原国兄弟か打取や

へたん、

村原

— 兄弟の手柄ならふものをらぬ、

瀬底

— 揃てをる人数降参たやへる、

【096・097左】

【096・097右】

村原

— 神妙なこと、

若按司

村原

— やあ村原よ、 — やあ思子

東江ふし

— あけ夢かやゆら

村原

— あゝ拜てなく事やゆめかややへいら、

過し按司添も嬉しやめしやいら、

乙梅

— やあ、敵の島国や籠の鳥心、

思て自由ならぬ待兼るけふや、

谷茶あまやあか生れ日てやり、世話にとひ

【098右】

かかて気のつかぬあれは、思子もり名付

逃忍ふ後に、谷茶追掛てのかる

かたなひらぬ、是迄よとめは美御迎に

いまふち、けふ拜事や夢かやゆら、

村原

— おもはずに兼て内通のあれは、おの

手段しちおて美御迎しちやん、やあ乙梅、

女身の上に命ちふり捨て、敵の手に
渡り思子取戻ち、あゝ末代の手本

沙汰とのころ、

— され西川の子使たやへる、城乗取
やひおれ——の用意美御迎たや

村原

へる、 — 一段な事よ——、

村原

— あゝ思子も拜て敵もうちすます、
かある誇らしやゝものにたとららぬ、
たう——、本の御城に美よんつかい
拝みやへら、

【001右】

若按司

— 嬉しさや互に踊て戻ら、

村原

— つれしさや踊羽御供しやへら、

つれいづいこ

— 御代つきよめしやうちす本の御城に
おかけふさへめしやうれ玉の思子

【098左】

註

- 1 「かしら」の誤りか。
- 2 「聞る」か。『兼島信備所蔵本組踊集』には「聞ル」とある。
- 3 「ひ」誤入か。『戯曲集』に「さかさほはからひ」とある。
- 4 「袷」の誤写か。『戯曲集』に「黒コや袷衣裳」とある。
- 5 「日」の脱字。『戯曲集』に「けふのよかる日」とある。
- 6 「のかす」のかす「誤写か。『戯曲集』に「のかす」とある。
- 7 「使」の誤りか。『戯曲集』に「西川の使」とある。
- 8 「し」の脱字。『戯曲集』に「知らしへのあれば」とある。
- 9 「と」の脱字。『戯曲集』に「なく泪と共に」とある。
- 10 「原」誤写か。
- 11 「よ」の脱字。『戯曲集』に「御素立よ」とある。
- 12 「さ」の誤写か。『戯曲集』に「きやさや」とある。
- 13 「誘」は「捌」の誤か。
- 14 「か」の誤字か。『戯曲集』に「気任のやから」とある。
- 15 「北谷」の誤か。『戯曲集』に「北谷屋良村」とある。
- 16 「奇」誤写か。『戯曲集』には「妙なもの」とある。「奇妙」で「妙」と読ませたか。
- 17 「使」の誤写か。
- 18 「かたへへ」誤字か。『戯曲集』に「語れへ」とある。
- 19 「る」の脱字。『戯曲集』に「たやへる」とある。